

(雜 錄) ○再び蛔蟲卵に就て

び來り、附近の梢を彼方此方飛交ひて叫べば雄親も飛來つて叫び廻はる。各親鳥の舉動は大膽に且つ粗暴に、近くは一問近くの樹上に迫まり來つて叫ぶ。叫聲、ビイ、ビイヨ、ビイー、と強く且つ頻繁なり。兩雛は上面微かに縁色の氣味ある灰褐色、耳毛の栗色至つて薄く、胸腹部に、淡く栗色をはのめかし、成鳥の如き斑點あれども、稍不鮮明なり、嘴には黄色を帶び、尾は短し。止むを得ず、兩雛を巢へ歸らしめ、其落付くを見、且つ親鳥の來り哺するを見届けて歸る。雷雨程なく來る。

八日正午、赴き觀る。長じたる雛在らず。他の一雛午前七時頃地上二間許なる松の枝にとまり居りしを、伐採夫等に捕へられぬたり。仍て之を松の枝に放ちて、隔てゝ觀察するに、兩親鳥時々來り雌親例の如く哺育す。この一雛の巢立は多少餘儀なく早められしものと認む。

以上、發見以來の觀察を概括せば、(イ) 孵化の時日を、二十九日なりとせば九日目、廿八日とせば十日目に、自づと巢の縁に出る迄に發育せしこと。(ロ) 發育の進度急速にして巢立間近くなりし一兩日に甚しかりしこと。之は暖地にて且つ季節に後れ居りし爲なるか。或は卵の一顆遂に孵化せざりしに依り自づと親鳥が哺給する兩雛への配當歩合多くなりし爲か。或は觀察者等度々接近せしに依り、幾分成育を急がしめし如きことなきか。今後精察を要す。(ハ) 成育の斯く速なるに拘らず、哺給回数が比較的少きこと、而かも毎回の分量もさして多か

らざること。(ニ) 巢立頃の雛は親鳥よりも茶褐色を帶ぶること。(ホ) 雄親は例へばウグハスの雄親が概ね巢の所在を一望し得べき地點にのみ警戒し居るが如きと異なり、遙に隔りたる地域に居り、但し雌親とは啼聲にて、相應するやうにて、依りて異變を知りては、忽ち飛來ること。等などは注意を惹きたる主なるものなり。

尙ほ巢及び卵についての實測左の如し。(一) 巢の直徑四寸強、内法三寸、深さ一寸六分、即ち側壁比較的厚からず。材料は、外側は殆んど齒朶(コシダ、ウラジロ、ツルシノブ)にて、稀に、ネヂキの花莖、トコロの蔓などを交へ、漸次内部に蔓草を廻らし、内面には、笹の葉、齒朶の細根、底部に松葉を敷きたり。此松葉は營巢當時は少くとも濕氣を帶び、從つて親鳥の工作のまゝに程よく曲がりしものと察せらる。されど寫眞に見る如く、内面の構造の細緻ならぬは、此鳥の通性の如し。(二) 卵は、一見ホシダカラガヒを瞥見したる感に髣髴せる感を浮ばしめらる。縦徑一寸、横徑七分、表面平滑にして淡き紫色の斑點、及び同色を帶びし栗色の濃き斑點、大小交錯す。就中、卵體の最も太き部に其著しきを認む。

(池村平太郎、川口孫治郎)

●再び蛔蟲卵に就て

余は前回「フォルマリン」に保存されたる人體寄生蛔蟲の子宮内に完成したる幼蟲又は細胞分裂の進みたる蛔蟲

卵を見出したるを以て是を報告し且つ此現象は普通の蛔蟲に於けると全く異なるを以て或る新しき型又は種なるべきかと記したるが其後之に關して訂正追加すべき材料を得たるを得て茲に是を附加する事とせり。前回の例によりて余は新しき人體の糞便又は新しく驅蟲せられたる蟲體に於て其蛔蟲卵の發育が進みたる物あるべきを思い之を檢查し居たりしが未だ斯くの如き物を得ず。受精したる蟲卵にては皆單細胞のみを認めたり。唯比較のため是等の蟲體及糞便は皆一〇%の「フォルマリン」に貯藏し置きたり。然かるに其後他の必要上「フォルマリン」投入後十八日を経過したる蛔蟲の子宮を檢したるに以前には確かに單細胞なりと思ひし物（此事は同時に蟲の子宮の一部を酒精に投じ脱水して切片としたる標本によりて精確なり）が著しく發育して多くの物は卵殻内に幼蟲體を生ぜしのみならず生きて動きつゝあるを見たり。即ち蛔蟲卵は一〇%のフォルマリン中にて死せざるのみならず發育を繼續するものなる事を知り前回の例も其一例なりしなり。是等の蟲體は「フォルマリン」に入る前に縦に切目を作り置けるを以て液の浸入遅くして其間に發育したるものとは考へられず。吉田貞雄氏の蛔蟲發育試験にては五%の「フォルマリン」中にて容易に發育する由なれば更に一〇%にても發育する事は有り得る事の様なれども兎に角普通組織標本固定に用ゆる液の中にて發育する事故少しく迷ひたり。更に「フォルマリン」に保存

(雜 錄) (○再び蛔蟲卵に就て)

したる糞便に於ても同様に其中にある蟲卵内に生きたる蟲體を見出せり、是等「フォルマリン」液中にある蟲體は爾後二三週間にして漸次に死滅す、唯液の表面に近く位せるものは稍永く生き得るが如し、前の十八日間にして外觀上完成せる幼蟲體を生ぜしは人工飼育の場合に比して一層早きが如きも此は八月下旬より九月上旬に亘りて觀察したる事にして溫度比較的高きと保存液の殺菌力によりて腐敗現象起らざりし事は發育を早めたるものもの如し。皆川靜明氏は食鹽水にて糞便より集卵せしものの中なる蛔蟲卵は三十度にて九月後に既に卵殻内に仔蟲を生ずと云へり。人體蛔蟲の外、大猫鵲蛔蟲に於ても同様に保存せられたる蟲體內の子宮中にある蟲卵には又發育生存せるものあるを見たり。更に似たる現象は人體十二指腸蟲及亞米利加十二指腸蟲にも見られ即ち保存せられたる此等蟲體の子宮内にある蟲卵は數十個に分裂し又は原腸期になれるものあり（新鮮の糞便中にては普通四細胞よりなれる卵を見るを以て母蟲子宮内の發育も亦其以下ならざるべからず。即ち保存液（「フォルマリン」一〇%）中にて發育したる物と見らるべし。又蟲卵を有する糞便を淺き入物に入れ是に數倍量の一〇%の「フォルマリン」を注ぎ數日後に見る時は幼蟲體完成せるものあり。され共蟲卵より孵化せし物は未だ見へず、皆此期に於て死せり。人體の鞭蟲にては余は未だ保存液中に於ける發育を見たる事なし。

(小林晴治郎)